

# 外部環境会計における推定的効果の標準化

市村志穂

キーワード：外部環境会計、推定的効果、環境影響評価手法、環境経営

## 1. 研究の背景と目的

企業が具体的に環境対策を実施するためには環境負荷に関するデータと環境対策にかかるコストや得られる効果など定量的な把握が重要となる。これらの情報を適切につなぎ、経営における意思決定や外部からの評価を促す役割を果たすのが、環境省の提案する「外部環境会計」である。「外部環境会計」をこの目的に一步、近づけるための手法として「推定的効果」の算定が環境省『環境会計ガイドライン2005』で提案されている。本研究の目的は、「推定的効果」に関する既存研究のサーベイを行った上で、これまで実務でバラバラに発展してきた「推定的効果」に関して算定内容と算定手法の標準化を目指す。

## 2. 算定の対象と手法

「推定的効果」を「経営リスク回避の効果」としてNO<sub>x</sub>、SO<sub>x</sub>、COD、BOD、全リン、全窒素、化学物質（PRTR）とし、「地球温暖化対策による効果」として生産時、物流時、消費時の二酸化炭素、「省資源対策による効果」として廃棄物最終処分量、「顧客効果」として製品使用時の電力消費量とし、日本の電子電機企業5社に対して、それぞれの削減量を環境保全効果として評価する。また「利益寄与の効果」を「環境配慮型製品の売上高」とし、JEPIX、MAC、LIMEを用いて、算定を行う。算定手法はある環境負荷物質の削減量にそれぞれの手法のデータを重みづけとして乗じる。

算定手順として、社内における環境負荷削減量、それに加えて社外の環境負荷削減量、さらに環境負荷低減以外の効果として、「環境配慮型製品の売上高」を含めて、3段階に分けて算定を行う。

## 3. 結論

ケーススタディーを行い「利益寄与の効果」として計算に含めた「環境配慮型製品の売上高」が、それのみで黒字になる影響力を持つことがわかった。環境経営を推進し、企業のあらゆる場面に織り込む上では、「推定的効果」の算定範囲は、「経営リスク回避の効果」、「地球温暖化対策による効果」、「省資源対策による効果」、「顧客効果」とし、それぞれに関連する環境負荷物質の削減量とすることが、望ましい。

算定手法については、JEPIXでは環境政策への貢献度を示すことができるというメリットが見られた。しかしJEPIXは単位がEIP（エコポイント）であるため、金額換算としてMACをさらに乗じており、JEPIX独自が持つ意味合いが薄れる可能性があるということが明らかになった。

MACでは、社会全体で削減される環境保全コストの内部化された金額や費用対効果を示すことができた。LIMEでは「環境保全コスト」に対して、各物質に対する環境対策の支払うべきコストを削減できたという意味で、得られる便益がどれくらいであったかを示すことができるということが明らかになった。

外部環境会計において、比較可能性を担保するためには、JEPIX、MAC、LIMEの3つの手法を用いて算定し、総合的に判断を行うことが妥当であるということがわかった。